

清水登之日記「略誌」(1907~1916) その1

伊藤 佳之

はじめに

栃木県出身の画家清水登之(1887~1945)は、さまざまな日本「近代」の画家のありようを体現した人物といえる。明治の終わりにアメリカで絵画を学び、その後フランスに渡って日本人画家のコミュニティに属し評価を得た。そこで培った人脈を活かして独立美術協会を結成、昭和初期において最も激しく揺れ動いた在野団体の中核をなした。また日中戦争開始後は陸軍美術協会の会員となり、従軍画家として戦地に赴き、戦争記録画の制作にも携わった。

清水は渡米する1907(明治40)年から没する1945(昭和20)年まで毎日日記をつけていたと思われ、1917(大正6)年から1945年までのうち、1928(昭和3)年分の一冊のほかは全て原本が現存する。1907年から1916年までの日記は、後年清水自身の手で「略誌」として一冊にまとめられた。

2013年から、有志によって清水登之の日記(以下「日記」と記す)を通読し、書き起こしをする勉強会が、ささやかに続けられており、一昨年「略誌」を読了した。本稿はその成果を紹介するものである。

1. 「日記」の先行研究について

清水の経歴を知るうえで「日記」は欠かせない資料である。原本には丹念に当時の事実や感情が書きつけられ、誇張少なく、資料的価値はきわめて高い。したがって、清水の没後に編集された年譜は、いずれも「日記」を典拠とするところが多い。特に『栃木県立美術館所蔵 清水登之』(2007年、栃木県立美術館)所収の「清水登之年譜」(杉村浩哉編)は、最新の研究成果を反映したものである。

また、日記そのものを書き起こして、その記述じたいを広く紹介しようという試みには、『清水登之展』図録(1991年、武蔵野市)所収の「清水登之日記」(1924年分のみ)、『清水登之 滞米日記と素描』展図録(1994年、財団法人大川美術館)所収の「日記より抜粋」(「略誌」~1924年の抜粋)、『清水登之、滞欧そして帰国後の軌跡』展図録(1999年、財団法人大川美術館)所収の「日記抄録」(春原史寛編、1931~1944年の抜粋)がある。また、2001年に清水の遺族宅で発見された1945年の日記については、『シンポジウム「戦争と表現 | 文学、美術、漫画の交差」報告書』(2016年、栃木県立美術館)所収の杉村浩哉「清水登之の終戦~1945年の日記から」で詳しく述べられている。

こうした先行研究はいずれも貴重なものであるが、「日記」の資料的価値の高さに比して、広く紹介される機会が少なく、その内容検討もいまだ大きな余地が残されて

いる。この課題を克服するべく、有志による勉強会が活動を続けている。

2017年10月現在の勉強会の参加者は、杉村浩哉(栃木県立美術館)、河野エリ(とちぎ蔵の街美術館)、小此木美代子(公益財団法人大川美術館)、春原史寛(群馬大学教育学部准教授)、山田隆行(早稲田大学文化構想学部複合文化論系助手)、忠あゆみ(アーツ前橋)、佐藤麻衣(昭和女子大学大学院)であり、伊藤佳之(福沢一郎記念館)が世話人をつとめている。本稿は、伊藤が参加者を代表して執筆することとなった。

2. 「略誌」の概要とその編集時期

「略誌」(図1)は、縦横15.0×厚1.1センチの冊子で、本文の総ページ数は66、表紙と本紙は同じ黄色い紙を用い、袋綴じされている(図2)。この冊子に1907年から1916年までの10年間の出来事が綴られている。表紙と小口下面には「自明治四十年至大正五年 略誌」と墨書で記されている。

清水が「略誌」をまとめたのがいつ頃のことかは定かでない。ただ「清水が滞米前半の日記を『略誌』にまとめた時期が後の日記に書いてある。1907(明治40)~1912(同45年)までをまとめたのが1927(昭和2)年9月27日、1912(大正元)~1916(同5)年をまとめたのが同月30日」(杉村)との指摘が勉強会であったこと、そして「略誌」に使われている紙が、「清水登之畫伯洋畫展覽会」(1939年12月11~12日、日本工業俱樂部(東京、丸の内)四階)の目録の裏紙であることから、「略誌」の編集は二度にわたっておこなわれた可能性がある。

わずか66頁の小さな冊子だが、「略誌」には、画家を志す若者の渡米生活が回想のように淡々と綴られ、ひとりの画家の生きざまを知るだけでなく、北米移民史の一端を知るうえでも、またシアトルでの日本人画家の活動を垣間見るうえでも、大変貴重な資料である。

「略誌」の内容については、本文を参照されたい。

3. 「略誌」の課題と今後の展望

先述のとおり、「略誌」は複数回にわたって清水自身の手で編集し直された可能性があり、内容にもいくつか不確かな点がある。今後1917年以降の日記を読み進めていくうちに、編集の過程や意図が明らかになり、不確かな部分が修正されることが期待される。そのため、今後も地道な「日記」の読解をすすめていかなければならない。

また今回「略誌」がひとまず活字になり、その成果が世に問われることで、今後「日記」への注目がさらに集まり、画家清水登之のみならず、近代日本美術史の貴重な資料として位置づけられることを期待したい。

勉強会の活動はまだ端緒についたばかりである。今後
も機会を捉えて成果を発表し、諸氏のご批判を仰ぎたい
と考える。

謝辞

本稿執筆にあたり、当該資料を所蔵する公益財団法人
大川美術館、ならびに清水登之長女の中野富美子氏に、
投稿及び掲載のご承諾をいただきました。この場を借り
て厚く御礼申し上げます。

[清水登之日記 略誌]

凡例：

1. 書き起こしにあたっては、頁が変わるごとに(改頁)
と記し、その番号を付した。
2. 勉強会で判読できなかった文字は「○」で記し、塗
り潰しは「●」で記した。
3. 漢字は日記の記述をそのまま使い、旧字体と新字体
の混在も可とした。かなについても同様。また表記の
誤りと思われる箇所も訂正せずに記した。
4. 傍点、消線、囲み等がある場合は「■」(黒四角)で
当該文字列を挟み、終わりの■の後に括弧で(傍点)
(囲み)などと記した。
5. 縦書の繰り返し記号は「/」(スラッシュとバック
スラッシュの組合せ)で示す。
6. 文字の挿入がある箇所は、挿入される文字を「\」
「/」(バックスラッシュとスラッシュ)で挟み記した。
7. 註は頁ごとにその末尾に記し、略誌全体の通し番号
を付した。なお註には書き起こしの段階で付された事
項に加え、勉強会の中で指摘された事項を「☆」の後
に記した。

(表紙)

自 明治四十年
 畧誌
至 大正五年

(表紙中)
(空き)

(改頁 1)

余の日記は渡米するに先ず父上が何にも言ふ
ことはない外國へ行つたら日記だけは必ず書けよ
といはれたのに初まつたものである。
明治四十年から大正六年まで毎日流して
置いた日誌は平凡に暮したところや思い出しても
不愉快になるところなどあり整理して置くことにした

明治四十年

成城学校へ栃木中学か\ら/轉校して士官学校へ入る
積りで一ヶ●年間東京へ滞在したが 只学校へ●
さい通学して居れば士官になれるだろふ位に考へて
居つて石にかちりついてもといふ努力はしなかつたから
遂に入試し振り落されて終つた

(改頁 2)

将来画家として身を立てやうか 軍人として暮
さうかといふ二本立の気持ちがその爲めはつ
きりして来て 画家になるには上野の美術へ入る
べきか外國で斯道の勉強をすべきかといふことにな
つた。士官学校へ入れなかつた残念さは内地
にとゞまつて絵の道を勉強しやうといふ氣にどうし
てもなれなかつた 当時三宅克己氏が米國にて作
品を賣つて学資を得 渡歐したこと^①など知つてみ
た丈に 渡航費だけ出して貰ひば彼地で働き乍ら
学資を得 当時西洋畫の本場とされてゐた佛蘭
西へ渡ることが出来やうと決心し 五月中旬出發
する迄 親戚の 河内郡吉田村上坪山の野口家^②
へ世話になつて日露戦役陣没勇士の肖像畫
を描いてやつたり 通俗的な日本畫の古いもの

(1) 三宅克己(1874~1954)が渡米したのは1897(明治
30)年。翌年イギリスに渡る。清水はどんな新聞や雜
誌の記事で三宅の渡米について知ったのか要調査。☆
ちなみに、三宅克己は、1924(大正13)年5月21日に清
水がニューヨークからフランスへ渡る時、同じ船に乗
っている(日記より)。これも面白い縁だと思ふ。(杉
村)

(2) ☆現在の下野市上坪山(旧河内郡上坪山)にあった
清水登之の母方の伯父の家。「(アメリカへ行くことを
父に納得させるため)家出同然で約20キロ離れた吉田
村(現南河内町上坪山)の親類の家に転がり込ん
だ。/「絵を描いてみろ」/母方のおじ、野口孫三郎
は、その力量にうなつた。登之は居候していた三カ月
間に日本画を描き続け、おじを納得させてしまう。小
学校教員の初任給が12,3円の時代。アメリカへの渡航
費用200円は孫三郎が敷地の多数のケヤキなどを売っ
て工面した。「/」は改行を示す」樺沢修「とちぎの

20世紀』『下野新聞』1999(平成11)年12月5日。

(改頁 3)

などから模写をしたりして希望者へ頒布したりした⁽³⁾
この上坪山の東 鬼怒川辺の親戚大道泉⁽⁴⁾の大○
家へも 酒の好きな清元の上手な 魚釣りのうまい
鶴次爺に誘はれて往復したりした さうしてゐる内に
洋行するに相應しい頭髪が延びて来た 濃厚な海老\茶/色
ダブルボタンの洋服も栃木町中学校⁽⁵⁾の生徒の服を作る
ところへ注文して旅行券の下附される日を待った。
届けを出す時 滞在期間を書くことになつてゐるので
心中深く十年位はと思つたが父母を安心さす爲め
三年間とした
董三⁽⁶⁾は中学一年生繪が好きだつたので 余に従つて
東の方 親戚へも往復したりした
吹上⁽⁷⁾や藤岡⁽⁸⁾の親戚へ十三佛の圖を描いてやつたりした

(3) ☆野口家には清水登之作とされる仏画や日本画の類
が数点所蔵されている。ただし「東翠」という号は父
藤十郎や弟董三も使っていたので、清水の真作と特定
するのは難しい。なお所蔵品のうち《十三佛》と《弘
法大師像》は、上坪山の東福寺にほぼ同じ図柄の絵が
あるため、これを模写したものと思われる。図3～6
を参照のこと。(河野)。

(4) 現在の真岡市大道泉か。

(5) ☆現在の栃木県立栃木高等学校の講堂には、歴代校
長の肖像画(12号位)が飾られており、美術の教諭が
描くことになっている。第2代～6代までは橋本邦助
(1884～1953)が描いており、第7代小林政一と第8
代土田長助は清水登之が描いた。(河野)

(6) 清水董三(しみず-とうぞう、1893～1970) 昭和
時代の外交官。明治26年8月1日生まれ。母校東亜同
文書院の教授(中国語担当)、外務省翻訳官、中華民国
大使館二等書記官などを歴任。昭和30年中華民国公使
となる。のち外務審議官などをつとめ、中国通として
知られた。昭和45年12月8日死去。77歳。栃木県出身。
(『デジタル版 日本人人名大辞典+ Plus』講談社2009年)。
☆清水登之と父藤十郎、そして弟董三は、精神的にと
ても近い関係にあったと思う。例えば、栃木警察署
に日比谷方面から当時の警視庁を見て描いた絵が、清
水登之の作として今も残っているが、これは実は、董
三が描いたものの上に登之が書き加えたものであると、
後に日記の中に出てくる。それほどこだわらないとい
うか、近い間柄だったのでだろう。ちなみに董三は書
をよくし、中国風のすぐれた書を遺している。彼は外
務省で一番中国語が出来た人といわれ、昭和天皇の通

訳も務めたそうだ。(杉村)

(7) 現在の栃木市吹上町。

(8) 現在の栃木市藤岡町藤岡。

(改頁 4)

愈々五月十五日乗船する日が来た。
父上は横浜まで送つて下さつた 当時吹上の
○太郎氏は警察官として横浜戸部署に
在勤して居つた 昇氏は全じく港町の高木回漕
店に勤めて居り 叔母の家あり 別井家ありで
他にも叔母の女子達縁づま居り これ等多くの
親戚があつた爲め 出発前ふだんに御馳走
された 早稲田へ通つてゐた岸信作(後藤田別井
家へ養子となる)吉屋郡長次男道明君等
に岸壁まで送つて貰つた
当時父上は元気盛りの三十九歳であつたが今長
男と別れるといふ時二なつて余の船上の姿を正視す
ることが出来ず面をそむけて泣いてゐることが判つて
余の決心に油をそゝいでくれた。

(改頁 5)

船は 加賀丸⁽⁹⁾ 六千噸級のものである 船長
は背の高い片足の悪い英國人である
此頃の外國通の船は 皆英國人か船長に備
はれ\て/ゐた。
横浜からシヤトルまで四千二百三十哩の距離を
兎も角この小さな蒸気船によつて渡らねばならぬ。
特別三等といふ部屋には三方に寝台が設けら
れてあり定員六名といふことになつてゐるところの二階
の寝台へ陣を取つた 農商務\省/の実業練習生と
して渡米する下條某と云ふ男が最年長として
頑張つてゐた この男は洋行の聖験もあるらしく洋食
の食べ方をよく話して呉れた 余の目的を知つて
水彩畫の版にでもしたのかと思はれる\程/手綺麗な半
切

(9) 加賀丸 日本郵船運航の日本～シアトル航路(1896
年8月1日開設)で活躍。1901年5月15日竣工、1932
年6月29日解体。参考：『日本郵船株式会社渡航案内』
日本郵船株式会社、1914年、7頁。

☆当時アメリカへ渡るとき、サンフランシスコとシアト
ル、二つの港街のどちらかを目指すことになつてい
ようだが、清水はなぜサンフランシスコではなくシア
トルを目指したのか。

『日本郵船株式会社五十年史』(1935年)によれば、
1896(明治29)年2月に「大北鉄道会社(グレート・ノ

ーザン)の社長ジェームス・ジェー・ヒル氏はキャプテン・ジェームス・グリフィス氏を其代表として我國に派し、同鉄道の西端華盛頓州シアトル市に向つて日本より航路を開き、紐育方面に至る船客・貨物を相互に接続せんと欲するの提議を当社に致したり」とある。また「当時シアトル市は人口六千の一小市に過ぎざれども、該鉄道は米大陸横断鉄道の中、最も短距離のものにして、且つ設備も整頓せるを以て当社はヒル氏の提議に応じてシアトル線が日本・紐育間の交通上桑港線に比して大圏航路に於て一日余の時間を短縮するの利あるに依り、他日必ず其長所を發揮するの時あるべきを信じ」云々「二十九年七月十八日を以てヒル氏との間に連絡に関する契約調印を了解し」「二十九年八月一日神戸出帆の三池丸を第一船として就航せしめ」「毎月一回の定期を踐行せしめたり」とある(143~145頁)。また重要な航路として明治32年日本政府の特定助成航路に指定され、そのおかげで新しく六千トン級の大型船を建設することになり、この中に清水が渡米の際に乗り込んだ加賀丸がある。こうしたグレート・ノーザン鉄道と日本郵船との連携が、シアトルの発展に大きく寄与したとされており、1914年に至っては、アジアからアメリカに輸入される貨物の75%がシアトルを通過したともいわれている(Mark Sundquist, Seattle, Arcade Publishing, 2009, p. 98)。また岩崎勝三郎著、松田為常編『最新渡米案内』(大学館、1905年)には、「此州は合衆国中最も遅く開拓せられた地方であるに依つて(中略)非常に低廉な地代で、数万坪の土地を買入ることが出来る、されば此州は移住民の爲めには富を作り身を立つるに、至極便宜な地方で〜」とある(125頁)。こうした背景があつて、日本ではアメリカに渡るならシアトルという雰囲気醸成されてきたと考えられる。ニューヨークまでの距離が、サンフランシスコからよりも近いということも、渡欧を夢見る清水にとっては決め手になったかもしれない。(伊藤)

(改頁 6)

大のものなど幾枚も／見せて貰つた それ等は土産として持参することを知つた 日本の名所繪ばかりだ 五重塔のある風景や何の爲めに施したものかある 風景に細小の点々を一杯打つたものなど記憶に残つてゐる

余と同年輩の男で文学に志してゐる岡山縣生れの萩原と乗り合はせ 余の寝台の下に横になつて何時も憂鬱そうな顔をしてゐた 戀をした女の写真を肌身離さず着けてゐた 船中の無聊を考へて讀物でも用意して乗ればよかつ

たと後二氣がついたが最う遅い

(改頁 7)

萩原か持ち込んだ早見八犬傳はよくこの後悔を救つて呉れた。

他の乗客三名は支那人である 慶應義塾に学んだといふ唐といふ青年丈けは僅かに日本語を解す丈けだ 三人から名刺を貰つたが今はどうなつたか見失つて この三人の活躍を知るよしもなし 西洋料理の味を知る機会がなかつたので 異様な臭のするスープやバター等運ばれる度にうんざりした 船が動揺し出すとこの悪臭(当時は確かにそう思つた)か猛烈に内蔵を刺撃して吐瀉を催うして来るには閉口した

(改頁 8)

(空き)

(改頁 9)

只デザートに運ばれる果物や菓子、アイスクリーム類は美味いと思つて口にした

船か日米兩國中間へ入つた二十二日の日は全日を二日重ねた

翌二十三日には乗客慰安日として放楽会といふのか催された 下級船員は此日を待つてゐました とばかり身についた鏝をぶちまける 飛び入れも歓迎したが大部分の配役は船員によつてなされた われ／＼の部屋へ出入するボーイ等三味線に生命を打ち込んでゐると言つても不思議でない程で これだから船はやめられませんかといふ三十過ぎた男である。 此頃の下級船員といふのは大体ならずや眞面目な仕事を厭やかる青年達のやうであつた 一人尺八の上手なのが追分を吹いて皆を感動させた

(改頁 10)

その尺八の音色が機関室から響くスクリーンの音にからまつて離船するまで耳底へこびりついた 二十九日 英領カナダのヴィクトリア港へ午前十時頃着いた 初めて余の眼に映じた外國風景 都会の美しさよりも沿岸涯なく打ち續くアメリカ松の素晴らしいのに驚いたものである

翌三十日ポータウンセント港¹⁰⁰着 此處で検疫があつて零時半シアトル港へ入つた 丘の上二建てられた港は遠方から眺めると ■後■(丸で囲み)後の丘

上にある建物迄

廣く／＼連なり大都会の感じがした

午後三時半 日本人街メイン街⁽¹⁰⁾の大北旅館⁽¹¹⁾へ泊
ることにした 行き交ふ同胞の顔色は皆青く
想像もしなかつた労働服を纏うてゐる人達も多く
山高帽白の手袋ステッキ姿の余は上陸瞬間

(10) ワシントン州ジェファーソン郡ポート・タウンゼン
ド (Port Townsend)。

(11) S Main St. の日本人街か。

(12) 一柳松庵 (讓二) 編『増訂 渡米の栞 第四版』1904
(明治37年) 附録12頁には「ジャクソン街308東洋貿易
会社下層」とある。

(改頁 11)

実はとんだところへ洋行したものだ近いところなら直ぐに
も引返へさうかとさい思つた程であつた
萩原君も同感だつたらしく此男は我慢が出来ない
と言つて次の便船でさつさと歸つて終つた
さて上陸すればどうにかなるだろふと安易な考を
持つた余も手持ちの金は幾らもなく 少ない中から
萩原君の〇〇する時貸與などしたので 何時までも
ぼんやり旅館住込みを續ける訳にゆかぬ 同船で
上陸した青年達は或は学僕となり下男となり、ホテル
の台処へ勤めるなど身の振り方に余念がない
先づ言葉を覺いること風習を知ることが大切だ

(改頁 12)

思つて日本人経営のその頃一番況気のよい
東郷桂庵といふところへ出かけグリーンレーキ⁽¹³⁾附近の
素人下宿屋マロネー邸へ働くことにした
女中の役を引受けたのである 言葉が判らないから
といふので週給五弗位の報酬であつたが早朝
から晩まで働き通して綿の如く疲れ果てた
此頃の主婦は外出する時御化粧をした上に網を冠り
地面を引摺る長いスカートを用いてゐた 室内の人間と
全く別人の感じがする程大へんな変り方をする
所謂油を賣る術を知らぬこの時代一生〇 (懸?) 命
働いたので 主婦も大へん喜んでゐるらしかつたが

(13) シアトル北部のグリーン・レイク (Green Lake) か。

(改頁 13)

どうしたことか此家にじつと辛棒する気になれず
一週間目に給料も貰はず 夕飯後家人の隙を

伺つて窓からトランクを投げ出し無断でホテル
へ歸つて終つた。そして次の仕事を考へてゐる
ところへ同船の三等客で渡米した岡山縣出身の
須山といふ男がベーリングハム市⁽¹⁴⁾郊外の農家から暇
を貰つてボーイを一人探しに来たのに逢つて直ぐ
同氏と一緒に小蒸気船へ乗つて出發した
此農家は三十前後の独乙人夫妻によつて 聖堂
され 野菜物を作りベーリングハムの港町へ出荷して
ゐるのである。

(14) ワシントン州ベリンハム (Bellingham)。

(改頁 14)

先輩の須山氏ニ教へられ乍ら野菜作りの手傳を
した 吾々の外に 佛蘭西人の老爺が一人働いてゐる
背の曲つた胡麻塩髯を延ばした老爺が時々
短気な青年主人から 小言を云はれて 何か
口の中でモグ／＼佛蘭西語でつぶやいてゐる光
景を見た。セルリの作り方 トマトの芽の摘み
方など興味があつてやるのではなく■只■ (右脇に書込)
給料の爲
めにやつてゐた
吾々の住家は主家から数丁離れた畑の一隅
小川に臨んで建てられた掘たて小屋である

(改頁 15)

町へ出れば味噌も醬油も幾らか知人から分けて
貰いるが 大体食物は塩で味づけした
真紅になつて美味さうに熟したトマトを摘んで
食べることも初めは青臭くて美味いとは思は
なかつたが次第に訓れて来て 美味さうなやつを
見付け出しては食べた 市場へ出すやつは青い
うちに摘んで数日間太陽の光線にあて、赤
くなるのを待つて始末した
腕を高く延ばしてやつと背に届く程の黒い馬
が二頭飼はれてゐた 耕作する時に使用したり
野菜を満載した車を引いて町へ出る役を

(改頁 16)

する。フランク。ヂョーヂと呼ばれて名前
を呼ばれた馬は直ぐ近づいて来る 進めも止れ
も日本語では全く通じなかつた。
或日曜日三色版の美しい風景畫の張つて
あるキヤレンダーから水彩畫で模写した
これまでの浅い聖験では主婦たるものは主人より

インテリアであると思つてゐたのでこの水彩畫を主人宅へ持来して主婦へ贈呈したが一向嬉し相な顔を見せなかつた 多分美術などには趣味がないのであろふ

(改頁 17)

港町から東の方 數キロのところになつた公園があつた 電車は主家ベルマンの裏を往復してゐる 町の人々は 日曜 祭日などには此處へ集つて楽しく話遊することにしてゐる ボートに乗つたり動物園の猿をからかつたり須山氏ハ感ずるところあり学僕になつて語學を勉強すると余より一ヶ月前ベルマン家を出て終つた 余も切角美術の研究ニ来たのに何時までもこの農園に埋まつて居たくなかつたから●●●

(改頁 18)

十一月一日シヤトルへ戻つた、東部へ一歩でも近づくことは美術の中心地へ近づくことであり汽罐庫ニ働くことは學資を■得■(文字逆転の記号)する早道であると思つたので 十一月十一日 東京市出身の男 九州の男等三人の連れとともに沙市を出發 十五日モンタナ州の有名な鑛山町ビュト市⁽¹⁵⁾郊外の汽罐庫所在地へと着いた 古い貨車を地面へ下したところが住家である 船室のやうに両側に棚が出来てゐる それがベッドだ

(15) モンタナ州シルバーボウ郡ビュート (Butte)。古くは鉾山町として栄えた。参考：大和久義郎「北米合衆国「モンタナ」州視察復命書」『移民調査報告第9』外務省通商局、1912年104~106頁。

(改頁 19)

部屋の中央部へダルマストーヴと呼ばれるダルマの感じのする形の抱へきれない程の大型ノストーヴが真赤に燃えてゐる 十六人住むことになつてゐる全型のもの他に一軒あり食堂と料理人の部屋になつてゐる 此處ニ働いてゐる十數名の同胞青年は大部分廣島縣出身で九州人がこれに次ぐ割合である。汽罐の手入するもの油を給與するもの 汽罐車の掃除をするもの 砂や水を積み込むもの 石炭積み 火落とし 砂 焼き 汽罐車を庫内外に運■び■(右脇に書込) 込み運

■び■(右脇に書込) 出する係

(改頁 20)

の者■とニ■(二重消線、その脇に「など」と鉛筆で書込) 二三人づゝニ別れて仕事をする事になつてゐる 冬は■零下■(右脇に書込) 30度以下に降る寒さで砂を 焼く小屋が暖かく 焼かれてまだ暖氣の去らぬ砂の中へもぐり混んで假睡をする氣持のよさは一寸忘れ得られない が汽罐車を乗せて廻はず役など寒風に襲はれて 羊の革で出来てゐる外套や手袋も時に役立たぬ程 寒い日に逢ふことがある。 仕事の多い時にはオーバータイムと云ふ時間外の仕事があつて二晝夜位は打通し働くこともある

(改頁 21)

鑛山で栄えてゐるビュートの町は下級労働者の群多く氣の荒んだところである 特に日本人は目の敵ニされ 日中街上で石を投げられたり ジヤツプなど、大声で罵倒されたりする不愉快なところである 支那賭博と花柳界が大繁盛 有為の青年も周囲の影響をどうすることも出来ぬらしく休み日など町へ出かけて そこに慰安の道を求める者も少なくなかつた⁽¹⁶⁾ 斯くして渡米第一年は一介の労働者として暮した。

(16) 「モンタナ州「ビュート」市」には「市内同胞」は一五名、「獨立營業者トシテハ僅ニ労働組合事務所、下宿屋兼球屋アルノミ他ノ七、八人ハ無頼ノ遊人ナリ」 「(待遇は)白人労働者ニ比シ遜色ナシ」としつつも「鐵道働キノ常トシテ貨車又ハ最モ粗末ナル陋屋ヲ家トシ一車ニ八人多キハ十人同宿シ一日ノ勞ヲ慰スルニハ甚足ラザルノ感アリ」。また旅館に起臥する労働者については「時ニ鐵道ニ働キ少シク金ヲ得バ直チニ賭博ニ夜ヲ徹シ甚好マシカラザル行爲多シト云フ當市ノ市民労働者大部分ヲ占メ労働黨大勢力アル丈ニ排日熱甚シク市内ノ労働ニハ一切關與セシメズト云フ」等。前掲「北米合衆国「モンタナ」州視察復命書」105~106頁。

(改頁 22)

明治四十一年 適齡前日本を出發したので 徴兵猶予願を出さねばならぬ

シアトル日本領事田中都吉氏宅出願
この汽罐庫で越年して新年より引續き真黒
に煤けた顔しては職場から貨車の吾が家へ帰つ
て悶々として暮す内 福島縣石城郡渡辺村⁽¹⁷⁾出身
の高木吉郎氏と次第に親しくなり 余は兄の如く
彼は余を弟の如く相慰め合ひ 余の目的を知
つて彼は何時までも此處に居る不利を説いた。

(17) 現在のいわき市渡辺町 (小名浜地区)。

(改頁 23)

彼は此家へ来る以前知り合つて現在農業を經營
してゐる友を思ひ浮べ一緒に出かけてその地方で
農業ニ従事しやうと誘つて呉れたので 十月六日
遂に此處と別れ ワシントン州ワツパト⁽¹⁸⁾。タツプニシ
ユ⁽¹⁹⁾間

の酒井氏聖營する農園へ暫く厄介になる
酒井氏は六尺豊かな立派な体格の好男子である
大学も出たらしく英語も流暢に話す
数人の同胞が下に働いて ジャカ芋、牧草 (アルファル
ファ) 等作り上げてゐた

(18) ワシントン州ヤキマ郡ワパト (Wapato)。

(19) 同郡トッペニッシュ (Toppenish)。☆1912年現在の
ヤキマ河流域の日本入就農者は45人、ワパト (Napato
と記載) とトッペニッシュはそれぞれ24人と7人。こ
の地方の農業の特色としては「比較的大規模」で耕地
面積が広いこと (四十噓ヲ下ルモノハ罕ナリ)、特産は
「秣草 (まぐさ)、馬鈴薯、舐瓜」など。また大規模な
農地で「アルファルファ」を計画的に栽培すれば銀行
からの借入をしても利益が上がるので、この地におけ
る「本邦青年農業者ノ比年其数多キヲ加フル所以ノ理
を見ルニ足ルベシ」佐藤魁一「北米南部華盛頓州哥倫
比亞河流域視察報告」、前掲『移民調査報告第9』、163
~168頁。

(改頁 24)

此附近は見渡す限り背高位の灌木帯
原住民インディアン、レザーベーション⁽²⁰⁾である。

即ち男子出産の場合 八十エーカー (約三十二丁歩)
が政府から與へられることになつてゐる
原住民は極めて水利の便なところでもあれば其
一部分を開墾して何にか蒔付けでもするらしく
大体怠けもので酒好きであるから 性のよくない
白人ニ騙されてウエキー一升位と八十エーカーの土地と
取り換へられたりしてゐる状況である

(20) インディアン (ネイティブ・アメリカン) 居留地 (Indian
reservations) の意。

(改頁 25)

この沙漠のやうな土地もよく働く日本人によつて
次第に開拓されて行く 雨量の極めて少ない
ところで 夏冬とも日本本土の中部地方と大
差なきところであるから日本人には暮しよいところ
である 灌木はセイジブラシユ⁽²¹⁾と呼ばれ 幹の太
いところでも腕位なもの 根が割合柔かだから
鋏で切り倒すことも簡単である 一日精を出して
切り倒すとすれば優に七八反歩は拓ける
酒井氏の世話により八十エーカーの半分を借りて

(21) Sagebrush キク科ヨモギ属の亜灌木。

(改頁 26)

高木氏と十一月二十三日より二人で押し建てた
八畳敷二間程の家へ住み開墾してヂヤガ
芋を植えたり水瓜 舐瓜 牧草など作った。
井戸を小屋の北側へ堀つて見たが何処まで掘つて
も玉石が出る計りでこれは途中から放棄し
て 直ぐ近く流れる溝 (灌溉用) の水を
使用することにした。
豚、鶏を低い水溜りのする附近へ飼つた
ヂヤガ芋の屑や水瓜に舐瓜の腐つたものなど
にて 豚はずん〜成長した。

(27頁以降は次号に続く)

(いとう よしゆき)

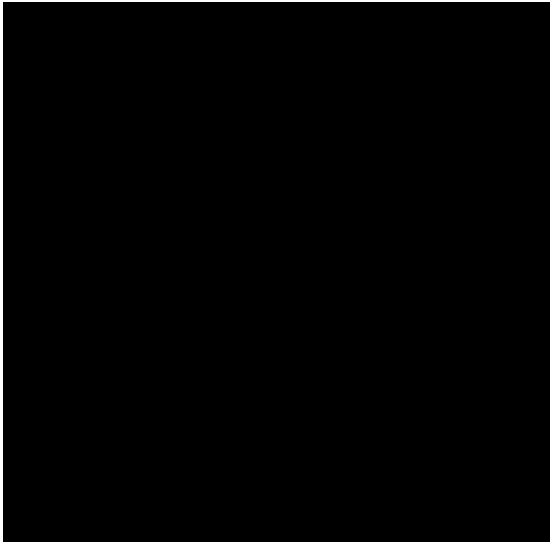


図1 「略誌」表紙

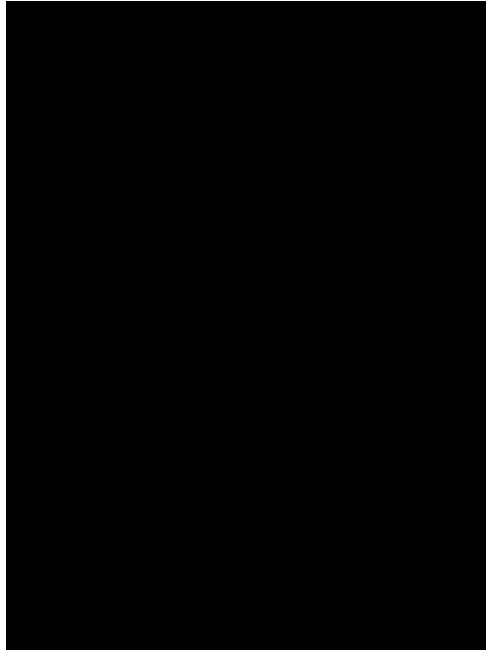


図2 「略誌」表紙の袋とじの状態

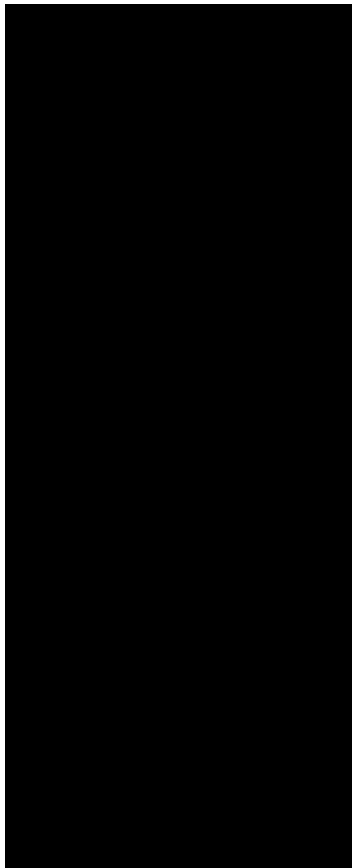


図3 《十三佛》東福寺蔵



図4 清水登之作とされる《十三佛》
「東翠」朱文円印 個人蔵

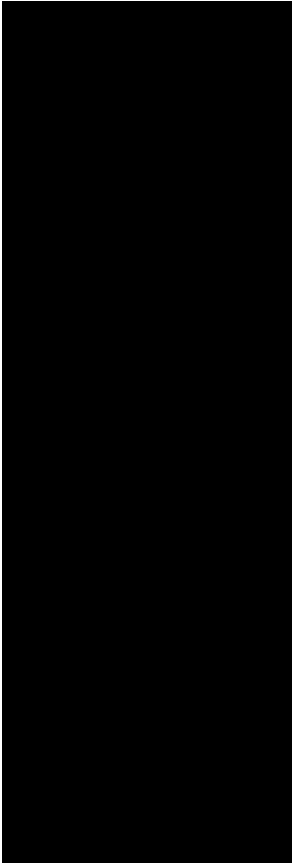


図5 《弘法大師像》
東福寺蔵

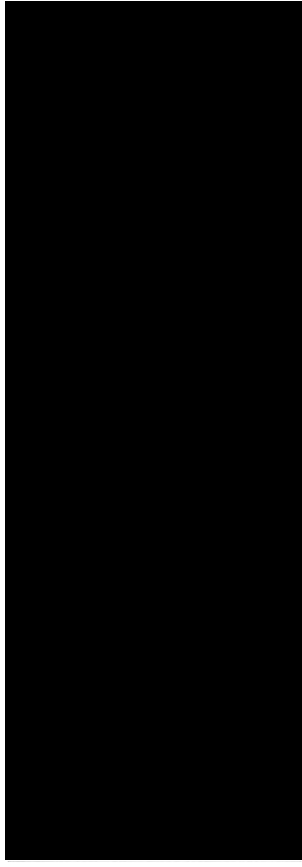


図6 清水登之作とされる
《弘法大師像》「東翠」
朱文円印 個人蔵